文化の力で大阪に活力を。

OSAKA*文化力

No.108・109
合併号
2010 SPRING・春

詳録24ページ

関西・大阪 文化力会議

各界のオピニオンリーダー35名が緊急提言！

リレーインタビュー
私のSWEET水都
『ぼくと1ルピーの神様』の著者
ヴィカース・スワループ　インド総領事

企業メセナ最前線
南海電気鉄道株式会社
山中 諄 代表取締役会長兼CEO

誌上舞台
雅楽『蘇莫者』
天王寺楽所 雅亮会楽頭 小野功龍さん

関西から文化力
POWER OF CULTURE

財団法人 大阪21世紀協会

リレーインタビュー 「私のsweet水都」

ヴィカース・スワループ

インド総領事

“インドの今”を発信していきたい

2009年にアカデミー賞、ゴールデングローブ賞等を獲得した映画『スラムドッグ$ミリオネア』。その原作である『ぼくと1ルピーの神様』の著者ヴィカース・スワループ氏が、インド総領事として大阪に赴任されています。今回は、各界から注目を集める異色の外交官の登場です。

大阪はホッとするまち

大阪は人も風景も温かく親しみを感じています。道を尋ねれば、言葉が通じなくても身振り手振りで説明し、10分ほどの距離であれば連れていってくれる親切な人々。まちを流れる川や運河と緑の水辺にも安らぎを覚えます。

食べ物もおいしいですね。お好み焼き、たこ焼き、しゃぶしゃぶ、うどん…。家族も皆、気に入っています。私は5つ星ホテルでの豪華な食事より、庶民的な料理が好きで、大衆食堂にもよく行きますよ。日本橋も楽しい町ですね。最新のパソコンや家電がそろっていて、しかも安い。息子たちと一緒に夢中で見て回っています(笑)。

庶民的で活気のある場所へ行くと、大阪は額に汗して働く人が担っているまちだという印象を受けます。また、東京は権力、大阪はお金を重視するという話をよく耳にします。「大阪人は商売に熱心で、あいさつも『儲かりまっか』だ」とか(笑)。でも私の見たところ、大阪人は心に余裕があり、人生を楽しんでいる感じがします。大阪は世界的な技術を持つ会社が密集する商業都市で、インドにとっては東京に次ぐ重要な取引先ですが、私にとっては“ベストシティ・イン・ジャパン”ですね。

近々『インド祭』を開催します

インドと日本は、古代から人と文化が行き交ってきた友好国であり、日本にはインドの伝統芸術の研究家もたくさんいます。この文化的な繋がりに加えて、昨今はIT産業などでの協力関係も高まり、昨年は日本の対印投資総額が初めて対中投資総額上回りました。大阪の総領事館でのビザ発行数も1日200人に達することもあります。私たちはこうした“現在のインド”も強く発信していきたいと思っています。

今年は久々に大阪で大きな『インド祭』的なイベントを計画しています。予定ですが、映画、ダンス、音楽、料理等、インドの多彩な魅力を楽しめる企画を練っています。

原作と映画の共通項は“希望”

「日本を舞台にした小説を書く予定は?」とよく聞かれますが、「外国人から見えるのは表面的なことなのですぐには無理」とお答えしています。ヤクザ、カプセルホテル、ラブホテルなど、面白そうな題材はありますが…(笑)。

『ぼくと1ルピーの神様』は、スラム街で生きる少年の物語です。私はスラムに住んだことはありませんが、徹底的にリサーチした情報で書き上げています。この原作と映画『スラムドッグ$ミリオネア』はかなり違った話になっていますが、構造的には同じです。ボイル監督は原作をきっかけにインドに興味を持ち、新鮮な驚きを物語に盛り込みました。ボリウッド映画(インド・ムンバイ<旧ボンベイ>で作られた映画)は基本的に夢物語ですが、本作にはリアルなインドが描かれ、しかも「貧しい子どもたちへ希望を与えている」と評価されています。原作でも映画でも誰かの希望に繋がれば、それは私にとって非常にうれしいことなのです。

ヴィカース・スワループ(Vikas Swarup)氏

1961年インド北部で弁護士の一家に生まれる。アラハバード大学で心理学・哲学・近代史を学んだ後、1986年にインド外務省に入省。トルコ、アメリカ、エチオピア、イギリスでの勤務を経て、2006年にインド高等弁務次官として南アフリカに赴任。2009年8月、大阪のインド総領事館総領事に着任。2作目の『Six Suspects』は今春、邦訳版を刊行予定。

関西・大阪 文化力会議

関西・大阪の文化をいかに担うか―
各界のオピニオンリーダー35名が緊急提言！

主催：(財)大阪21世紀協会
共催：大阪国際フォーラム、(株)大阪国際会議場
協力：(社)企業メセナ協議会
2010.1.28　大阪国際会議場

市民、文化人、企業、行政マンら延べ1000人が参加

文化による地域活性化や産業の高付加価値は、国際的な都市競争力の強化には欠かせない。しかし、昨今の国・自治体の大幅な文化事業の見直しは、地域の文化に大きなダメージをもたらそうとしている。そこで大阪21世紀協会は、関西で活躍する文化人、学界、経済界などのオピニオンリーダーやまちづくりに活躍する市民、NPO、メセナ関係者を招いて、緊急の文化会議を開催。関西・大阪が抱える文化的課題を抽出し、文化力向上の方策を探った。

文化立都への新たなマイルストーンに

大阪21世紀協会会長 熊谷信昭

文化とは学術・技術・芸術の三術であると、梅棹忠夫氏（国立民族学博物館顧問）が言われています。私の専門分野である科学技術について申しますと、21世紀はハードウエア、ソフトウエアに加えて、ヒューマンウエアが極めて重要です。使いやすさや、環境との調和性、安全性、デザイン性といった意味ですが、その大部分はいまだ成熟していません。戦後、驚異的な発展を遂げた日本は、世界から尊敬されるどころか、国際社会から基礎研究タダ乗りという恥ずべき非難を浴びました。エコノミックアニマルと蔑まれたりもしました。我々はこの屈辱を忘れず、学術、技術、芸術が調和した、ヒューマンウエアに裏付けられた健全な科学技術を創出し、世界から敬愛される国家を志さねばならないと思います。これは地域についても同様です。それぞれの地域が繁栄し、かつ大勢の人々から敬愛されるためには、文化立都を目指さなければなりません。今日はそのことをお互いに確認し、具体的な取り組みを推進するための新たなマイルストーンにしたいと願っています。

基調講演

大阪の文化振興に長きにわたり取り組んできた山崎正和氏。基調講演では、迷走する大阪の文化行政に苦言を呈するとともに、今後大阪が目指すべきメトロポリス的文化のあり方が提起された。そこで示されたのが“新・摂津国”の復活。既存の行政域を越えた新たな枠組みで、大阪の文化は復興するのか。

「関西・大阪の文化復興について」

山崎正和氏
劇作家、大阪大学名誉教授

1934年京都府出身。京都大学文学部哲学科卒業。関西大学教授、コロンビア大学客員教授などを経て、大阪大学教授、同大学名誉教授。平成13年より中央教育審議会委員として、教育・文化・行政全般の政策策定に参加し、平成19年より会長。平成11年紫綬褒章、平成18年文化功労者。

大阪が目指すべき文化

みなさんは毎日昼の時間に放送されるNHK『生中継!ふるさと一番』という番組をご存知でしょうか。この番組は、日本全国の小さな町や村を訪ね、その土地の文化を愛し、保存活動などを行っている人たちを紹介する番組です。小さなお宮のお神楽を守ろうとしている人、廃線になった電車の保存活動に懸命になっているグループなど、いろいろな方々の涙ぐましい努力が紹介されています。これはまさに文化活動であり、それ自体が文化と呼べるものでしょう。

翻って、私たちが大阪の文化を考える場合、この番組の観点からいえば、大阪はすでに何もしなくていいぐらい豊かな文化に溢れています。そしてまた、私たちが暮らす大阪は、東京に次いで日本の中心の一つであり、メトロポリス(大都市)なのです。では、メトロポリスにふさわしい文化とは何か。それはお神楽や廃線になった電車を守ることではなく、もう少し大きなものを目指さなければならないはずだと思います。

メトロポリスに必要な文化の条件

メトロポリスにふさわしい文化の条件を挙げると、第一に、その文化は当の土地だけでなく、日本をはじめ、アジア、そして世界といった、より広い世界に対して貢献していることが重要です。また、その文化はその地域外の人、あるいは異なる文化や習慣をもつ人たちに対しても開かれていなければなりません。開かれているということは、多くの人たちを吸引し、同時に多くの人々の力を複合する、つまり多様なものをその場所に統一するということです。例えば歴史に残る文明を築いた、古代ギリシャのアテネがそうでした。

じつは、アテネの文化をつくり、支えた人はほとんどが外国人でした。古代ギリシャの歴史家ヘロドトスは小アジアのハリ

カルナッソスの出身、数学者・哲学者のピタゴラスはサモスという町の出身など、地域の上でも階層の上でも、多様な人が集まってアテネを作り上げたのです。そんなアテネの町で多様な人たちを統一していた精神性は、理性でした。

一方、彼らはそれぞれ違った町の感性を身につけており、それらが統合された時にあの偉大な町が誕生したのです。つまり、大都市は見知らぬ土地からやって来た人々の集まりであるために、他人の目やしがらみなどを気にする必要がなく、個人の多様性が発揮しやすくなります。そうして新しい流行や文化などが生まれ、連動して新しい商品購買傾向も発生するなど、無名性だからこそお互いが影響し合い、集団となって作り上げるある種の力が自然発生的に生まれます。東京でも、東京以外の地域の人たちが一旗揚げようと集まり、その結果、さまざまな文化を生み出してきました。さらにはその文化を評価する力も高まったのです。じつは、これが大変大事なことなんです。メトロポリスにふさわしい文化の条件の二つ目は、“このまちで誉められたら一流だ”“世界に通用する”と思わせるような、評価機能を持つことなのです。

大阪の権威の失墜

三つ目の条件は、都市には見えざる権威が存在しなければならないということです。そうした観点から大阪を振り返ると、残念ながら大阪にはメトロポリスにふさわしい文化の条件が整っていません。ここでの大阪とは大阪市を指しますが、ここには権威になるようなものがないのです。どの文明でも権威の中心には大学があります。大学では、学問、文化、芸術が集中して養われることで、権力で侵すことができないある種の権威が生まれます。権力が芸術活動を抑えるようなことがあれば、これは問題です。しかし、今では大阪市内には大阪市立大学しかなく、代表的な私学もすべて市内からなくなりました。府県の中心都市でありながら大学がないのは日本中で唯一でしょう。また、国公立の音楽ホールや劇場もなければ、出版社もない。新聞社に関しては、大阪にはたくさんの大新聞社がありますが、実質的な紙面づくりはほとんどが東京集中です。

真の大阪らしさとは

お叱り覚悟で申しますが、大阪人の感覚・考え方自体がこうしたメトロポリス的なものを嫌う傾向があります。反権威主義と申しますか、気取ったものは嫌いだという大阪特有の気風なのでしょう。しかしながら、じつは大阪の町人は江戸時代、あるいは第二次世界大戦以前は、大いに気取り屋さんでした。おしゃれも好きでしたし、芸能文化も大好きだった。とりわけ学問が大好きで、懐徳堂という自前の大学さえ作っていた。しかし残念ながら、戦後は京都の公家文化や東京の武家文化の気取りを快く思わず、大阪は町人の町だと固執したばかりに、気取らないことが大阪人の誇りになってしまったのです。

そしてもう一つ、かつて大阪は、大阪文化を復興し経済を立て直そうと、「すきやねん大阪」というスローガンを掲げました。たしかに大阪生まれ育ちの人たちならこれで十分満足できるでしょう。しかし、大阪には府外から来た人も多く暮らしており、その人たちは「好きやねん」という言葉を聞かされて、自分たちは阻害されていると感じたかもしれません。少なくともこの言葉で守れるものは、『ふるさと一番』の文化であって、メトロポリスの文化ではないのです。

新・摂津の国の復活

そこで私はみなさんに一種のショックを与えるために、あえて暴論を申し上げたい。それは、しばらく大阪という単位を忘れてみようではないかということです。少し視野を広げてみれば、案外救いがあります。それが「摂津の国」の復活です。

摂津とは大阪と兵庫の海岸地帯を含む三角形の領域を指し、8世紀の頃はすでに延喜式にも登場するなど大変古い歴史があり、当時は自ら市場を開いたり、度量衡を決める権限さえ持っていました。近世は豊臣秀吉も一目置いた商業が盛んな場所になり、近代では神戸の方からジャズや写真など、西洋文化を導き入れる入口にもなりました。そのような歴史あ

るエリアを今に復活させるべく、新・摂津を作り上げてみてはどうでしょうか。

摂津という地域でくくると、大変面白い文化人が活躍されていますし、知識基盤社会、科学技術を最先端にしながら、それを支える広い教養の世界が浮かび上がってきます。大学も大阪大学や神戸大学など、相当水準の高い大学が入ってきます。さらに劇場やホール、多くの美術・博物館もこのエリア内にあります。これらを統一したイメージにまとめれば、パリやアテネ、あるいは東京に匹敵する大都市イメージができあがり、ここにはたくさんの人々が集まり、訪れる人も自ずと増えるでしょう。

また、大学間の相互協力や交通網の整備など、やるべきことがたくさん考えられます。なかでも、もっとも大事なことは伊丹空港の拡充です。私は伊丹空港を二十四時間国際線が乗り入れられる空港として再開発すべきだと考えます。もちろん住民の方々の迷惑を最小限に抑え、費用をつぎ込まなければなりませんが、今ならできる。摂津の国が蘇るために、やってみる値打ちがあります。そういうことを考えれば摂津の国も夢ではないのではないか。繰り返しますが、『ふるさと一番』的な文化ももちろん大切です。それも生かしながら、一方でより大きなメトロポリス文化を築いていくべきであると私は願っています。

基調講演

企業メセナ協議会の専務理事として企業の文化活動を支援する加藤恒夫氏。基調講演では、一昨年から続く景気悪化に伴う社会の疲弊や歪みに負けず、再び活気ある地域社会を取り戻すための緊急提言と、文化力をもって新たな地域再生に取り組む行動原則が示された。

「文化力を高め、地域を豊かに」

加藤恒夫氏
企業メセナ協議会　専務理事

1969年、大日本印刷株式会社入社。長年にわたり文化事業を担当し、グラフィックギャラリー、現代版画の美術館の企画運営、フランスの美術館に関わるメゾン・ド・ミュゼ・ド・フランス、ルーブル美術館との共同実験事業などを手がける。企業メセナ協議会では長年幹事を務め、2005年4月から現職。

文化の意義

阪神淡路大震災から今年で15年が経ちました。当時私は堂島にある大日本印刷のギャラリー運営を担当していました。

震災から1か月後のある日のことです。年輩のご婦人たちがお見えになり、静かに作品をご覧になられました。そして、帰り際にある言葉を残されたのです。「私たちは震災で被災し、今日ここで初めて心を癒されました。明日から生きる元気をいただきありがとうございました」と。これを聞いて、私たちが続けてきた活動は、地味ながらもこんな効果があったのだと大変感動を覚えました。

また、震災後に上演された演劇に、山崎正和氏プロデュースの『GHETTO/ゲットー』という作品がございました。それは、明日はナチスに殺されるかもしれないという極限状態に立たされながらも、リトアニア居住区でユダヤ人たちが劇団を作り公演を続けるという話でした。あのような状況下でも文化を求め、それこそが自分たちの生きる証だという内容に強い衝撃を受けたものです。最近は某知事による文化施設廃止の施策なども聞こえてきますが、震災のような体験をしますと、社会生活において文化がいかに欠かせないものであるかと、つくづく実感します。

新たな政策ビジョン

しかしながら、一昨年の秋から始まった経済的な混乱は、私たちの生活のさまざまな場面に影響を及ぼし、文化の活動にまで及んできていることは大変残念なことです。

本来、私たちの日々の社会活動や経済活動は、社会を構成する一人ひとりに幸せをもたらさなければならず、また、これを目標にしなくてはならないはずです。しかし、こうした状況に至ったのは、社会全体が経済的な価値だけを評価し、博打に近い投資競争を繰り広げた結果、破綻してしまったことが原因ではないかと思っております。経済的な成功だけで、「勝ち組」や「負け組」といった評価が下されてしまう状況にまでなってきている。これは不自然であり、健全な状態にあるとはとてもいえません。

そこで私たち企業メセナ協議会は、これまでと同じようなやり方や枠組みで社会再建を目指すのではなく、社会再生の基本理念や枠組みを大胆に変えていくことが必要だと考えました。そうして社会創造のための緊急提言として『ニュー・コンパクト』という地域再生政策ビジョンを発表し、政界はもとより各界に訴えてきたのです。

“コンパクト（COMPACT）”とは、（Community Policy for Action）の頭文字をとった造語です。もともと“小さくまとまった”という意味もあり、また、国連や英国の政策用語でもあります。私たちは今こそ壊れてしまったバーチャルで巨大な社会像から脱却し、等身大の持続性のある社会を作り出していく必要があります。そのためには、このニュー・コンパクトという地域再生政策ビジョンにもあるように、文化への集中投資が急務であると主張しています。

社会創造の源泉

コンパクトな社会の基本はやはり地域であり、地域コミュニティの再生が不可欠です。だからこそ文化への集中投資は、地域に対して行われることが最も効果的な戦略であると考えます。

では、なぜ文化なのか。地域にある自然や歴史、伝統芸能などは貴重な資源であり、維持していくことは確かに大切です。しかし、それを新しい視点と創造力をもって活用していくためには、文化こそ新しい社会を創造するための新たなソフトを生み出す源泉であると考えたからです。住んでいる地域が快適で、さらにワクワクするような刺激に溢れた場所であれば、その地域外にいる人々が移り住み、「一緒にその刺激を享受したい」「あの活動に参加したい」という欲求が出てくる。それが地域の継続的な発展につながっていくだろうと考えます。都市文化というのは“スクラップ&ビルド”であり、いろんな刺激がぶつかり合い作り上げていくことがなにより必要なのではないかと思います。

5つの行動原則

そこで、ニュー・コンパクトによる集中投資を行うにあたって、5つの原則を考えました。

第一が「循環型社会の再生と創造」。循環型社会とは、自然環境との共生とともに地域ブランドなどの創出によって、下請け主体の産業や下請け都市から脱却すること。そして、基本的な社会サービスのほとんどが歩いていける範囲で充足するような社会のことであり、そのような循環

型社会の再生と創造を提案させていただきます。

第二が「地域文化の再生と創造」。文化は人々の生き甲斐を生み出し、社会創造の新たなソフトを開発し、新たな経済と社会システムを生み出す原動力となる「クリエイティビティ（創造力）」を高めます。とくに近年注目されているのが、有形無形の地域遺産に注目し、これを地域の文化資源として活用し、地域・都市創造に取り組む事例です。これを地域再生のために活用することが重要です。

第三が「市民自治による社会的な課題解決」。地域再生の取り組みにおいて、最も重要なのが市民自治を担う市民セクターのイニシアティブです。これまでのように市民セクターが行政の下請けだったりするのではなく、これからの地域再生は市民自身による組織づくり、市民セクターを強化する新たな戦略が必要です。寄付制度など、市民組織が自主財源を確保できる仕組みを強化し、雇用を含む市民組織の自立を促す制度設計が求められています。

第四に「セクター間ネットワークの強化」。市民セクターを強化していくためには、行政を含め、企業、大学、商店などの個人事業主など、地域を基盤とするさまざまなセクターが支援し協力しあっていくことが必要です。とくに地域に根ざした企業の役割がますます重要になります。現在でも地域企業の人材や技術などさまざまな資産を地域再生のために活用することで成果を挙げている例も多々あり、これをネットワーク化することで、今まで以上の力を発揮することになると考えます。

第五が「地域間ネットワークの形成」。国内外を問わず、それぞれの地域で工夫を凝らし、目覚ましい成果を挙げているところ、あるいはユニークな目標を立て、実績を上げているところなどが、各々の手法をもっと水平展開し、地域間のネットワークをさらに強化することが地域再生に大きく寄与します。互いに情報交換をしたり、共同で事業に取り組んだりすることで、単独では不可能なことも可能に近づけることができるようになります。

文化力を高め、活気ある社会へ

私たちは社会全体に漂う閉塞感に押しつぶされてはなるまいと思っています。今こそ文化力を高め、社会を活気ある元気なものにしていく必要があり、また、私たちにその力はあるはずだと信じて行動していきたいと思っております。関西、あるいは大阪にはニュー・コンパクトの実践事業のモデルともいえる活発な民間活動がたくさんあることを力強く感じております。市民の持てる知恵、持てる資源を出しあって、新しい地域づくり、新しい公共を作っていくことこそ、これから求められることなのです。そのために、今の状況を変えていこう、そのために一緒に汗をかこうという意気込みのある人たちの存在こそが、着実な前進を支えるものだと思っております。

大阪文化祭賞受賞者コンサート

基調講演のあとは、チェリストの林（はやし） 裕（ゆたか）さんによる記念コンサートが開催された。林さんは平成21年度の大阪文化祭賞グランプリ受賞後、関西在住の音楽評論家でつくる『第30回音楽クリティッククラブ賞』も受賞。10年に1人といわれる逸材として広く注目されている。この日はピアニストの鈴木華重子さんの伴奏で、サンサーンスの『白鳥』ほか4曲を披露した。

交流会では、岩本恵理さん（ピアノ）がショパン生誕200年を記念して、代表曲である『ポロネーズ（英雄）』や映画『戦場のピアニスト』でも演奏された『ノクターン（遺作）』など4曲を披露。岩本さんは平成21年度の大阪文化祭賞奨励賞受賞者で、現在、ポーランド（ワルシャワ）と奈良を拠点に、日本とヨーロッパでオーケストラとの共演やリサイタルに定期的に出演している。

林 裕（チェリスト）/本誌表紙にも掲載
東京藝術大学卒業。第62回日本音楽コンクールで第1位・黒柳賞。アフィニス文化財団及びローム音楽財団の奨学生として、ドイツ・フライブルク音楽大学大学院留学、首席修了。青山音楽賞、松方ホール音楽大賞など受賞多数。兵庫県立文化芸術センターのシリーズで年間支持率No.1アーティスト。'93～'96年大阪フィル首席チェロ奏者。現在、神戸女学院大学、相愛大学非常勤講師。

岩本恵理さん（p25にプロフィールなど記事）

まちで何を学び、いかに人を育てるのか

都市における文化創造の場づくりを考える

文化とは学術・芸術・技術の3術であり、それを支えるのは人であると言われる通り、人こそ財産であり、人を大事にする大阪でありたいと思っている。第1分科会では、まちが人を育てる学びの場になるためには何をどう推進すればよいのか、知的ネットワークをどう構築するのかという観点で、実際に現場で活動されている方々の事例をご紹介いただくとともに、学びの場としてのまちの可能性について議論したい ――
議長／堀井良殷

発言者

木田好子氏（音楽プロデューサー）
きだ よしこ／相愛大学ピアノ科卒、'95年音楽事務所設立。『朝の光のクラシック('04年～)』『中之島国際音楽祭('06年～)』等を開催。大阪国際会議場音楽顧問。

奥野武俊氏（大阪府立大学学長）
おくの たけとし／大阪府立大学大学院修士課程修了、同大学工学部教授を経て'96年学長。大学コンソーシアム大阪常任理事・産学連携部会長を兼任。

定藤繁樹氏（関西学院大学副学長）
さだとう しげき／元京都リサーチパーク部長、関西学院大学商学部教授を経て現職。大学と地域連携による都市再生等に取り組む。現在は社会連携を担当。

江　弘毅氏
（(株)140B取締役編集責任者・ナカノシマ大学主宰）
こう ひろき／'89年京阪神エルマガジン社で『ミーツ・リージョナル』誌を創刊・同編集長。'06年(株)140Bを設立、『月刊島民』『ナカノシマ大学』を主宰。

金水　敏氏
（大阪大学大学院教授）
きんすい さとし／大阪大学コミュニケーションデザイン・センター長。専門は国語学・言語学。主著『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』他

小原啓渡氏（大阪市立芸術創造館館長）
こはら けいと／文化支援ファンドの設立や造船所跡地をアートスペースに再生するなど、芸術環境の整備に関わる活動を続ける。'06年より現職。

平松邦夫氏（大阪市長）
ひらまつ くにお／'71年毎日放送入社。『MBSナウ』のキャスターを18年間務めた後、北米支局長、役員室長等を経て'07年退社。同年大阪市長に当選。

議　長

堀井良殷 大阪21世紀協会理事長
ほりい よしたね／東京大学卒業、'58年NHK入局。大阪放送局長、NHK理事を経て現職。大阪文化祭選考委員会会長。主著『なにわ大阪興亡記～だから元気を出さないと～』他。

新しい価値観を発見する場

堀井　当分科会前半は、まちなかにおける学びの場づくりを推進されている方々の、実際の取り組みをご紹介いただきます。まずは、大阪をワークショップシティにしようと活動されている小原さんから。

小原　平成21年の夏に、『200DOORS（トゥーハンドレッド・ドアーズ）』というワークショップイベントを開催しました。200種類のワークショップが1講座ワンコイン（500円）で受けられるというもので、“DOORS”とは、体験を通して人々とふれあい、新しい価値観を見つけるための扉を意味しています。1年目は38講座でしたが、2年目に100、そして昨年は200講座にまで増えました。将来は『1000DOORS』にしたいと思っています。主催はIWF（インターナショナル・ワークショップ・フェスティバル）実行委員会と大阪21世紀協会、関西広域機構。昨年は古典芸能やヨガ、ゴスペル、貯蓄術などさまざまな分野のワークショップを、大阪市中央公会堂や芝川ビルなど市内7か所で開催しました。自分に向いているかどうか分からなくても、試しに体験できる手軽さが珍しいとあって、テレビや雑誌などにも取り上げられました。そのいくつかをご紹介します（以下、テレビニュースの録画を紹介）。

小原氏

大阪から世界へ、世界から大阪へ

木田　私はこれまで、「誰の演奏会に行ったら良いのか」「どんなオペラを聴いたら良いのか」という相談を多く受けてきました。クラシックコンサートは入場料が高いので、

木田氏

失敗したくないという気持が強いんですね。そこで、映画を観るような低料金で鑑賞でき、好きな楽器や作曲家、演奏家をご自身で確かめていただきたいという気持ちから、2004年に『朝の光のクラシック』をはじめました。「若い才能を大阪から世界へ、世界から大阪へ」という願いを込め、関西の多くのアーティストを紹介して2010年3月で51回目。これに出演した多くの演奏家が、その後世界で輝かしい成績を上げています。例えば16歳でハノーバー国際バイオリンコンクール1位になった三浦文彰さんは、『朝の光のクラシック』に出演した当時はまだ13歳でした。

また、2005年には大阪市の後援で『咲くやこの花賞』や『大阪文化祭賞』の受賞者も加わって『中之島国際音楽祭』を開催しました。さらには大阪市の姉妹都市である上海音楽院や上海交響楽団などとのネットワーク作りや、2009年には国際音楽祭で四天王寺雅楽と韓国の国立国楽院との共演を果たしました。「私たちは文化を産業だと捉えている。文化立国を目指して、文化は消費ではなく投資だ」という韓国文化院の方の言葉にはっとしたのを覚えています。これからもこうした活動を続けていきたいと思っています。

まちそのものがメディア

江　京阪中之島線の開業（2008年10月）に合わせて、広告代理店から中之島をPRする情報誌を作らないかといわれ、『月刊島民』を創刊しました。これまでのまちの情報誌といえば、消費にアクセスするだけのものでした。美味しいものや感じのいい風景やカフェなどを、メディアのサイズに合わせて抜いてくるんです。テレビが放送時間に合わせて情報を編集するのと同じですね。しかし、中之島というエリアを考えたとき、まちという場そのものがメディアではないかと思いました。『月刊島民』で中之島の近代建築や橋、中之島を舞台にした小説などを特集しているのはそのためです。そしてさらに、中之島という学びの場を共有しようと『ナカノシマ大学』を構想しました。幸い大阪大学の鷲田清一総長のご賛同を得て、平松邦夫市長にプレゼンテーションを行ったところ、「面白い」と乗ってもらえました。そうして2009年10月に大阪市中央公会堂で平松市長や鷲田総長、内田樹神戸女学院大学教授たちによるキックオフセミナーを開催。はたしてどれだけの人が集まるかと思っていたら、『月刊島民』誌上での告知が効いて、500人もの大盛況。これに手応えを得て、以後毎月1回開講しています。

江氏

社学連携で大学が市民とつながる

堀井　大学は社会にどのような学びの場をつくり実践しておられるのでしょうか。

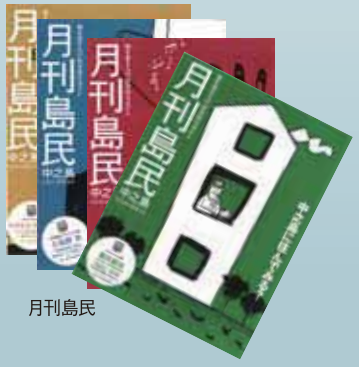
金水　大阪大学が実践する社学連携について、『コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）』と『21世紀懐徳堂』の取り組をお話いたします。CSCDは、医者と患者や建築家と施主のように、専門家と非専門家のコミュニケーション回路をいかに設定するかを研究する機関で、鷲田清一総長のリーダーシップのもと平成17年に設立しました。この背景には、科学

平成20年開催『100DOORS』の講座風景

『200DOORS』パンフレット（2009年）

中之島国際音楽祭（2009年10月2～4日）

『朝の光のクラシック』や『中之島国際音楽祭』『ナカノシマ大学』などの会場となる大阪市中央公会堂



月刊島民

金水氏

技術は何を目指しているか国民への説明責任があるとする国の施策（科学技術基本計画）があり、本学はそのアウトリーチ活動（学びに対する要求や行動を誘発し、学習の機会を与える活動）に重点をおいています。実施にあたっては、特定の企業と結びつく産学連携ではなく、市民一人ひとりとつながる“社学連携”を目指しています。例えば哲学について語り合う『哲学カフェ』や、市民が大学に課題を持ち込む『サイエンスカフェ』、大学と社会が連携して知術を人々に還元（デリバリー）するトークプログラム『知デリ』などを開催しています。また、『21世紀懐徳堂』は、こうした社学連携の試みを大阪大学全体で広げて行こうというもので、18世紀初頭に大阪商人がつくった学問所『懐徳堂』の精神を受け継ぎ、平成20年4月に設立されました。これは大阪大学独自のもので、本学と大阪21世紀協会、大阪市、株式会社140Bを同志として、『21世紀の懐徳堂』というプロジェクトも市民協働で推進しています。

定藤　2002年9月に実施した社会人の学びに関するアンケート調査で、約3700名の回答中、7割以上の社会人に学びの意欲があることが分かりました。そこでこうしたニーズに応えようと、2007年4月に関西大学、関西学院大学、同志社大学、立命館大学が呼びかけ人となり、同年10月、キャンパスポート大阪（大阪駅前第2ビル4階）に『NPO法人関西社会人大学院連合』を設立。京阪神の大学・大学院26校が集まってコンソーシアムをつくり、主にビジネスパーソンを対象と

定藤氏

して、ビジネスに関する大学院レベルの教育を行っています。ビジネスパーソン向けの専門セミナーは、関西経済連合会や関西生産性本部、大阪市と連携して毎年20数講座を開講しています。受講料は1回あたり5000円と手頃で、マーケティングやファイナンス、組織管理、起業、テクノロジーマネジメントなど、内容はかなり専門的です。最近は、団塊（定年退職）世代を対象に、セカンドライフを開発する学びのニーズが高まっています。また、社会起業家になるためにNPOへのインターンシップや法人の立ち上げを行ったり、「ベトナムの現地経営者の養成」では、実際に受講者が現地に出向いて日本企業の現状を把握したりなどしています。その他、親（父）子で学ぶキッズサマーキャンプ、大阪21世紀協会の提供による「都市文化論」など、社会人の幅も広げながら活動しています。

大学生にスイッチを入れる

奥野　大学の教官は今、学生のコミュニケーション力の低下に困っています。就職活動の際には、企業の方から「話しのできる学生を送ってほしい」といわれるほど。なぜそうなったのかというと、大学進学率の上昇に伴って学生層が変化してきたからだと思います。最近は「人を傷つけたり傷つけられたりするのは嫌だから友だちと話しをしない」という新入生も少なくありません。こうした状況のなか、大和川以南の南大阪地域の大学・短大30校で作っている『南大阪地域大学コンソーシアム』では、さまざまな大学から学生を集め、グループによる学びを実践しています。例えば学生を関西空港の日航ホテルに合宿させ、「関西空港を活性化するにはどうすればいいか」を考えさせます。学生たちは関空の利用者などへのインタビューや活性化の具体策を提案し、教官はインタビューのしかたや抽出した事象のまとめかた、プレゼンテーション方法などを一度にコンデンスして教え込みます。そうすることで、学生にスイッチが入るんですね。

奥野氏

今の学生はこうしたスイッチが入らないから、大学に進学しても大学生になったという意識が薄い。「大学生だから自分のことは自分で決めなさい」と言っても意外に思われるんです。そうした学生に対しては、さまざまな大学が集まるコンソーシアムでの学びを経験させると、学びへの良いスイッチが入ると思います。

行政が学びの場を提供

平松　まちのなかにある学びとは、大阪というまちがもっている磁力、つまり、ゆとりや遊びを育んできた大阪人の力だと思います。そうして人と人との温もりが感じられることで、学びの意欲が刺激されることでしょう。そして行政は、そういう場を提供できると思います。最近とても嬉しかったことに、中之島を中心に昨年開催したイベント『水都大阪2009』が、平成21年関西元気文化圏賞の大賞を受賞したことがあります。私はこのイベントの実行委員長として何度も会場に

平松氏

『知デリ』

キャンパスポート大阪
（大阪駅前第2ビル4階）

水都大阪2009中之島会場
（2009年8月22日～10月12日）

足を運び、ボランティアの方々と挨拶を交わしたり、走り回って喜んでいる子どもたちの笑顔を見るうち、行政がこういう場をしっかりと提供していかなくてはならないと思いました。また、多くの人が『水都大阪2009』で人と人のつながりの大切さを学んだことでしょう。その後、中之島ではじめた物産市『大阪マルシェ』では、買いものの楽しさや客と売主のコミュニケーションを通して、人々の生活に豊かさを与えてくれていると思います。私は、こうしたことこそが、街場での学びだと考えています。行政としてはお金のかかる話に応えるのは難しいですが、私は大阪市長として、こうした場を提供できるよう、さまざまな規制で融通のきかない市役所の体質も変えていきたいと思っています。

産学官民一体となった場づくり

堀井　後半は来場者からよせられた質問票に答える形でディスカッションを行いたいと思います。まず、「学生と社会人が一緒に講義を受ける効果」や「大学生のコミュニケーション力低下」について、質問が来ています。

奥野　学生同士のグループで勉強させたら、「僕にも友だちができることが分かった」という感想が返ってきて驚きました。それは授業の目的ではないけれど、それで学びのスイッチが入れば良いかなと思います。シニア層と学生では、違いがありすぎてインターアクションは起きません。

金水　昔ながらの大学市民講座は、高齢化と固定化が進んでいます。若い世代は、インターネットですぐ情報が得られるのに、自ら出向いて金を払って受ける講義に魅力を感じないのでしょう。そこで大学の知術を開放し共有するためには、カフェスタイルの雑談風授業も必要だと考えます。インターネットなどでは得られない現場感やフラットな人間関係の中から、創造的な発想も生まれてくる。そうした場づくりを目指しています。

定藤　社会人大学院では、産業界の実態を知るために企業経営者も講師に招きます。自分の仕事に関する知識しかない社会人学生が、異なる企業や異なる考え方の人と交わることで、クリエイティブな発想が生まれる。この意義は大きいと思います。

江　街場では、「どこで何を食べようか」と「どうして金儲けをしようか」というような、消費と経済の2つの軸しかなくなってきているように感じます。また、経済合理主義によって、ファーストフード店のように客とのコミュニケーションを排した店舗が増える一方、コーヒー1杯で長時間楽しめるカフェ的な場所が、どんどん姿を消しています。ナカノシマ大学では昨年、中央電気倶楽部の大食堂で2000円・ワンドリンク付で、講談師の旭堂南海さんと浪曲師の春野恵子さんを招いて聴き比べをしました。今、街場では、こうした人と人がゆるやかにつなげるためのプロデュースが必要でしょう。

奥野　江さんや小原さんが企画されているように、大学が外に出ていくことも大切です。とはいえアカデミックな部分も保たなければならない。市民公開講座では、レベルの高いシニア層のニーズにも応える必要があります。

学びによって生きる力をつける

小原　200DOORSが大学の公開講座と異なるのは、アカデミックなこととは関係なく、ちょっとした好奇心に応え、楽しめることを最重視していることです。面白いと思ったら、さらに市民講座やカルチャーセンターに通われるのもいい。そのための踏み台のようなものです。また、DOORSが開催できるのは、ワークショップコーディネーターがいるからこそ。現在、専門の養成講座を受けられた方々が30人以上がおられます。仮にひとりのコーディネーターが5つのワークショップを持てば、100人で500のワークショップができる。だから1000DOORSも夢ではないのです。

堀井　コミュニケーションといえば、音楽を聴いた後でアーティストと交流できるような場があればいいですね。

木田　じつは『朝の光のコンサート』の後にそうした交流の機会をつくりたいのですが、大阪市中央公会堂の午前中使用は12時までで、それを過ぎる場合は、午後の使用料を全額払わなくてはなりません。1000円の入場料という低予算のコンサートですので、1時間だけ小割で貸してほしいといっても規則で認めてもらえません。また、最近は空席も目立ってきて、子どもたちには無料で聴かせてあげたいと思うのですが、教育委員会に何度掛け合っても挫折するばかり。せめてこれだけはなんとかしていただきたいです。

金水　アートエリアB1というカフェプログラムを京阪電鉄中之島線のなにわ駅コンコースで実施していますが、ここは行政上道路にあたるため、物を販売できません。最近は自動販売機が置けるようになりましたので、やっとカフェらしくなりました。こういうことも大事ですね。

定藤　文化力を高めるためには、経済的な活力が不可欠だと思います。経済力が弱くなったので文化力で生き残ろうというのはおかしい。社会人大学院は経済界が主体的に関わっていますが、行政も、大学・大学院施策として、経済活性化の元になる人材育成に取り組んでほしいと思います。

平松　皆さんのご意見を参考にさせていただきたいと思うと同時に、大阪の企業をまず元気にしたいという思いがあります。行政は学びの場を提供する一方で、大阪にはこんな社会貢献をしている企業や大学があるということを、ちゃんと名前を上げて発信していいと思います。それをするのが大阪市の役割だと思います。

堀井　大学と社会の連携や、200DOORS、ナカノシマ大学のような自主企画としての学びの場など、さまざまな角度で“まちでの学び”が展開されているのが分かりました。思えば懐徳堂とは、元禄バブルが弾けて将来に不安を抱いた町人たちが、学びによって時代を生き抜く力をつけようと興したものです。石田梅岩の心学もしかり。今また不安定な21世紀を迎え、生きる力を一人ひとりが学びによって身につけていく必要があるのだと思います。ありがとうございました。

第1分科会

革新と創造性こそが伝統文化を守る

関西ブランドの多様性と、そのありかたを考える

関西・大阪が誇る能、歌舞伎、文楽は、日本を代表する伝統芸能である。天神祭など地域の歴史文化に根ざした伝統的な祭事も数多く継承されている。第2分科会では、それらのなかに関西・大阪のアイデンティティを探り、現代にあった形でどう守り、変化させ、未来に引き継いでいくのか。さらにさまざまなブランド資源に恵まれている関西をいかに磨き上げ、世界に広く発信していくかについて議論をしたい ── 議長／木津川計

発言者

高島幸次氏（大阪大学招聘教授）
たかしま こうじ／大阪天満宮文化研究所研究員を兼務。日本近世史および天神信仰史を専攻。天神祭のガイドを養成する「天満天神御伽(おとぎ)塾」などに取り組む。

中村翫雀氏（歌舞伎役者）
なかむら かんじゃく／'95年上方歌舞伎の大名跡、五代目中村翫雀を襲名。上方歌舞伎の継承に情熱を注ぐ。四代目坂田籐十郎の長男。屋号は成駒屋。

廓正子氏（演劇評論家）
かまえ まさこ／産経新聞社を経て、大阪文化祭選考委員・同審査委員、堺文化振興財団理事、上方芸能文化顕彰審査委員。大阪市民表彰(文化功労)、藍綬褒章。

阪口純久氏（上方文化芸能協会理事）
さかぐち きく／老舗料亭「大和屋」女将。上方の伝統行事、今宮戎の宝恵駕籠行列、住吉大社の御田植え神事、天満宮の船渡御などの保存・継承に尽力。

村田省三氏（アートコーポレーション（株） 専務取締役）
むらた しょうぞう／京都大学卒業。同社が提唱した地域ブランド向上について調査研究を実施。'09年関西経済連合会「関西ブランド向上研究会」の座長を務める。

八木意知男氏（京都女子大学教授）
やぎ いちお／専門は国文学、神道史。和歌や神道史に関する著書多数。住吉大社教学顧問も兼ね、伝統催事に精通。

アドバイザー

上田正昭氏（京都大学名誉教授）
うえだ まさあき／歴史学者。日本古代史を中心に神話学・民俗学などを視野に入れ、広く東アジア的視点から歴史を究明する。著書多数。勲二等瑞宝章。

議 長

木津川計氏（『上方芸能』代表発行人）
きづがわ けい／雑誌『上方芸能』を創刊、編集長を経て現職。立命館大学産業社会学部教授、文化庁芸術祭賞選考委員他多数の要職を歴任。主著『文化の街へ』他。

調和型が生んだ上方文化

木津川氏

木津川　私は常々、文化力が衰弱するとその都市の格が落ちていくと考えています。文化力をどのように強めていくか。まずは上田先生に基調提案をお願いいたします。

上田　私は京都生まれですが、平成3年から大阪女子大学の学長を6年間務めるまで大阪を誤解しており、品格のないまちという先入観がありました。それがわずか6年で、大阪にはたくましいエネルギーを秘めた文化力があることを実感しました。本日の基調講演で山崎正和さんが『新摂津構想』を提唱していました。摂津の「津」は難波津であり、江戸時代まで事実上、日本の表玄関でした。確かに重要な観点ですが、私はむしろ京都・大阪を含む「上方」というくくりで文化をもう一度、見直したいと思います。象徴的な言い方ですが、上方の仏教の信仰は観音様です。観音信仰は女性原理、調和型です。関東は成田山新勝寺の本尊、不動明王信仰でこれは男性原理の対決型です。調和型の上方は難波津を中心に外国の文化を積極的に受け入れ、わが国独自の文化を創り出しました。インターナショナルな面もあり、いわば和魂漢才、和魂洋才の文化です。その原動力となったのが町人です。掛屋、蔵元などの大商人が誕生し自力で経済を展開しました。懐徳堂という町人による町人のための学校をつくり、素晴らしい人材を輩出しました。そんな大坂町人の文化力のなかで上方の芸能も育っていったのです。そこには自信と誇りを持てる、そして新しいことを創造する力がありました。それをもう一度、再発見する必要がある。古きを守るだけで大阪の伝統文化が存続していくかは疑問です。

上田氏

木津川　ご提案を受け、上方文化を守る、創るの2つの視点で考えていきたいと思います。それでは住吉大社の御田植神事について、八木先生よろしくお願いします。

芸能、催事の現状と課題

八木　現在、住吉大社では6月14日に御田植神事という行事が行われています。起源を遡れば1800余年前の神功皇后の時代の伝承を持ち、住吉さんが現在の地に鎮座なさったときから関わりを持っています。歴史性が十分存在しているというのが1点。それから今、大阪市内のまちなかに田んぼがどれだけ残っているかということです。教科書で農業という産業があることは習いますが、具体的に知る人は少ないでしょう。子どもの田植え体験は今各地で行われていますが、稲刈りはほとんど機械でします。機械刈りではワラが出ません。苅田にワラを積み上げたものを「ツボケ」といいますが、このツボケからワラを取り、収穫を祝う亥の子祭に使う、畳職人がワラ芯に使うなど利用されてきました。ツボケは手刈りをしない限り存在しません。そこで住吉さんでは、田んぼの代かきから、水を張り田植えをし、夏には畔に蛍が飛び、秋の刈り入れ、10月17日は宝之市神事を行って豊作に感謝し、ツボケをつくる。そんな一連の農耕行事が見えるように、御田植神事を復元していきたいと考えています。それが大阪のまちなかで伝統ある農耕文化を守っていく一つの方法であり、子どもたちに伝えていくべきではないかと思います。

木津川　御田植神事は大阪も古代から稲作農耕民族であった証。失ってはならない原点だということですね。次に宝恵駕籠について坂口さん、お願いします。

阪口　今宮神社、十日戎の宝恵駕籠の起源は江戸時代の宝永年間（1704～1711）ともいわれています。明治の中頃から花街が誘客手段の一つとして、お昼はお迎え籠と称して芸者衆が10丁ほど連ねてお参りし、夜に福笹をまちへ配って回りました。最盛期の昭和13年頃はミナミに芸者衆が約3000人おり、30丁ほど連ねた時代もあったそうです。戦後、社会情勢の変化から花街だけでなく市民参加のお祭りにしていこうと、昭和41年にプロジェクトを立ち上げ、福娘の募集や夏の子ども戎などいろんな行事をこしらえていきました。今宮さん、住吉さん、天神祭などでは花街が受け持つ年中行事があります。それを守っていくために昭和58年、司馬遼太郎先生らのご発案で「上方文化芸能協会」が発足しました。それでもだんだん芸者数も減り、今は芸者が乗る籠は1丁、歌舞伎や文楽の方、野球選手の方々にも乗ってもらい15丁ほどで続いています。お祭りいうのは賑やかであってこそ。その賑やかさをどうして保っていくかに苦労している状態でございます。

阪口氏

木津川　ご苦労がよくわかりました。続きまして中村翫雀さん、お願いします。

中村　歌舞伎という芸能は能、狂言と違ってあくまでも民衆の娯楽として始まったものです。明治時代には商業ベースに乗り、今は松竹株式会社が興行を行っています。興行的に成立しなければ当然、公演も芝居小屋も減ります。戦後、関西の歌舞伎が衰退したのも、お客様が入らなくなったからです。役者もみな東京へ移ってしまい悪循環でした。今は少し持ち直していますが、娯楽の種類や質は時代とともに変わっていきます。私は世の中からなくしたいものはなにかと聞かれればまず、テレビと答えます(笑)。もちろん不可能なことですが、テレビは劇場に出かけなくても家で見られる。それでも私は、歌舞伎も含め舞台芸術すべてに関して、生で見ることのおもしろさを皆さんはわかっていると

大正12年頃の宝恵駕籠行列

中村氏

思っています。その認識をどこかで引き戻す、その工夫が必要です。上方歌舞伎には独特の匂いがあります。よく言われるのが、上方の役者はリアルな表現をするということ。東京の役者は型の追求とその継承を重んじます。上方は気持ちで動くのです。今年1月に忠臣蔵の通し狂言を行いました。上方の役者が演じるのだから、いつもの忠臣蔵とは違うものをお見せしようと。それが興味を引いたのでしょうか、おかげさまで大好評でした。東京の歌舞伎座が今年5月から立て替えに入ります。毎月かかっていた歌舞伎公演が数年間ゼロになる。その分、関西での公演が増えれば、これは上方歌舞伎の大きなチャンスになると思っています。

木津川　ありがとうございました。歌舞伎とともに世界に誇る芸能、文楽について、廓正子さん、お願いします。

廓　伝統芸能の伝統とは、守る部分も確かにありますが、変わっていくこともあるという前提でお話ししたいと思います。文楽は昭和38年に松竹の手を離れて国の保護を受け、財団法人文楽協会が発足しました。協会と契約している文楽技芸員は今、大夫24人、三味線19人、人形37人の計80人です。その半分、40人の技芸員が「伝統芸能伝承者養成研修」の出身です。かつては師匠に入門する徒弟制度でした。その内に入門者が減り、その危機感から後継者を養成するこの制度がつくられました。これは大きな変化です。研修生は全国からの公募で、入れても才能がなければ途中で落としていきます。厳しい世界ですから、脱落して誰もいなくなった年もありました。けれども40人が育っていることで今の文楽は成り立っています。文楽は東京の方がよくお客が入っているといわれます。東京は人口が多く、町中に大学生もたくさんいます。そうなると一つの教養、お勉強として見に行く。ところが大阪ではやっぱり娯楽です。自分が見て楽しかったらまた、足を運ぶ。必ずしも大阪の人が文楽を軽んじていると私は思いません。日本橋の国立文楽劇場が昨年4月、開場25年を迎えました。今年1月までの記念興行では、大入りが出る月もあるくらい好評でした。

廓氏

『はなやか関西』を世界に

木津川　それでは今後、大阪・関西の文化をどう構築していくか。村田さんからお話いただきます。

村田　地域文化の優位性のあるものを関西のブランド資源ととらえ、どう守り、育て、発信していくのかを、関西経済連合の「関西ブランド力向上研究会」で発表しましたのでそれをご報告します。関西といえば大阪を中心とした100kmほどの地域に、これだけ歴史や伝統文化が数多く、そして連綿と続いているエリアは日本にはもちろんなく、世界でも珍しいでしょう。それを発掘整理し、関西を世界に向けて売り出そう。これが地域ブランディングの考え方です。そのキーワードが『はなやか関西』です。都の王朝文化、自然美、伝統と創造の土壌、最先端の物作り…。関西の持つ多様性が一つにまとまって花が咲くことを表現しています。研究会では世界に誇る関西ブランドとして、(1)歴史文化と共に生きる・関西、(2)環境先進地域・関西、(3)エンターテインメント・関西、(4)知とモノづくり・関西としてまとめ、関西ブランドセンター機能の構築などのアクションプランを提示しました。やはりブランド資源には伝統に加え新たな魅力づけ、ストーリー化が必要です。私の個人的な意見ですが、大阪では年末から1月にかけて「OSAKA光のルネサンス」、夏には天神祭という圧倒的な火と光と水のイベントがある。これをいっしょにくくれないか。奈良では、冬の若草山の山焼き、東大寺のお水とり、奈良公園の燈火会、春日大社の万灯籠、それらをつなげれば新しい光と水の芸術として魅力が増すのではないか。そういう観点もあると考えています。

村田氏

木津川　上田先生には「関西ブランド力向上研究会」を進めていくなかで大変お力添えをいただいたと聞いています。

上田　『はなやか関西』というキーワードですが、「はなやか」という言葉は美しい、きらびやかというイメージだけでなく、勢いがある、際立っているという意味を含みます。この2つが関西にはあると私は思っています。関西という言葉はかつて近畿から中国地方までを含めたエリアを指しました。つまり西日本全域を入れた関西論を展開すべきで、その中心に大阪がなるという考え方をしていただきたいと思います。

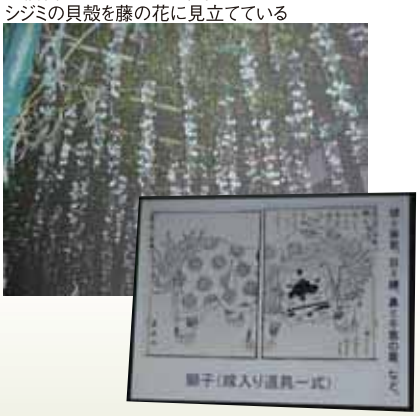
木津川　上田先生には冒頭から発破を掛けられ通しです。それでは高島先生からの提言をお願いいたします。

高島　伝統は守るだけでなく革新が大事と先ほどから議論されていますが、むしろ革新することが伝統だと私は考えます。天神祭は1050年以上の歴史があり、伝統的な祭とだれもが思っています。ところが一番中心の乗り物、菅原道真公を奉安する御鳳輦(ごほうれん)が出たのは明治9年、船渡御も現在のコースになったのは昭和28年、まったく伝統はありません。天神祭の中身はどんどん変化しているのです。伝統芸能が守られなくても自立できる手段、それが革新なのです。今回、私は伝統とは逆に大阪からほとんど姿を消した〈造り物(つくりもん)文化〉を紹介したいと思います。造り物とは、ありふれた日常品の風合いに着目し、何かに「見立て」ること。意外性のある材料で意表をつき、造形の工夫、アイデアと技術で勝負するのです。これは大阪が発祥で江戸時代にブームを巻き起こしました。たとえば嫁入り道具一式で獅子を

高島氏

つくる、化粧道具だけで鶏をつくるといった具合です。私は天神祭のボランティアガイドさんたちと現代の造り物として、天満宮に〈しじみの藤棚〉をつくりました。シジミの貝殻を藤に見立てる。また乾物でつくった猩々（しょうじょう）人形は、麩や高野豆腐を着物の模様に、昆布を袴に見立てました。実はこの造り物文化が大阪から波及し今も西日本各地に残っています。市民参加のイベントになったり、作品が常設展示されたりと現役です。それが大阪では絶滅状態です。伝統を守るのも大切ですが、その復活も考えていきたいというのが私の提案です。

天満宮につくられた造り物。
シジミの貝殻を藤の花に見立てている



婚礼箪笥などをモチーフにした獅子舞絵。
江戸時代の大阪の造り物文化が伺える。

守り革新し、文化力を発展

木津川　それではディスカッションに入りたいと思います。

廓　文楽の研修制度という革新を先ほどお話しましたが、文楽は歌舞伎と比べて新作が登場しにくいんです。それでも昨年、シェイクスピアのテンペストを翻案して上演しました。成果は賛否両論でしたが、かなり若い層も見に来て話題にもなりました。

中村　高島先生のご意見の通り、歌舞伎も革新してきたからこそ生き残ってきました。伝統的と思われがちな『曽根崎心中』という狂言は昭和28年の初演です。中村鴈治郎家も明治時代からの家で決して古くから続く家ではありません。時代の要求に応えて変化することに常に考慮していますが、どこまで変えるのか、その境目が難しいと思います。

村田　変化のなかでコミュニケーションやストーリーづくりも考えなければ、受け取る側も意味がよくわからないのではないでしょうか。光を使ってきれいなものを創っても1年目は話題になりますが100年は続かない。神戸ルミナリエが支持されるのはやはり「鎮魂」という大きなテーマがあるからです。それからだれがこれをしかけていくかの点では、もちろん市民ひとり一人、NPOも大切ですが、やはり政治にも必要な役割があると申し上げたいですね。

高島　村田さんがおっしゃる通り、私が提案した造り物は、見に来た人とつくった人の間にコミュニケーションが生まれるということなんです。今のイベントは提供する、見に行くというスタイル。その間をつなぐ人間、しかけが必要です。江戸時代には口上師という人がいて、祭があると間に立って説明していた。そういう文化を復活したいのです。

阪口　生前、司馬先生に私が「先生、文化ってなんですのん」とお聞きしたことがあります。そしたら先生は「そやなあ、大和屋に来て今日はよかったなあと思うて帰れることや」と。それはしつらえだけ、サービスや料理だけがよかってもだめで、全部が揃ってなかったらそう思えないと教えてもらいました。それを一生懸命守ってきましたけれど、そういう文化をわかってもらえる方々が増え、またそんな余裕、時間をこしらえてもらえるように、私たちも努力しないといかんなと思っています。

八木　余裕という意味で言いますと、神社などでは休日に神事の日をあわせるように極力努力をしています。反面、文部科学省の方針では、大学では所定の授業時間数確保のため休日返上で講義をしなければならないのが現状です。国が定めた休日を国民が守れない、これは大きな矛盾です。もう一点、現在、日本の大学では日本史を習わなくても卒業できます。そんななかで神事などと言っても、言う側が突出していると見えるでしょう。そういう現状もご理解いただきたいと思います。

中村　欧米ではお芝居が夜の7、8時に始まり10、11時で終わるのが一般的です。日本の歌舞伎は昼の部は11時から、夜の部は4時から。これでは会社勤めの人は平日はまず行けません。今の興行形態自体が観客動員にそぐわない。歌舞伎が取り組まなければならない大きな課題の一つです。

高島　歌舞伎も料亭の大和屋さんにも行きたいけれど、懐事情が続かないのも事実です。同じ大阪大学教授で劇作家、今は内閣官房参与でもある平田オリザ氏がおもしろいことを言っていました。「演劇保険」を実現したいと。私はもう少し範囲を広げて「文化保険」という制度を国がつくってはどうかと思う。つまり医療保険と同じで日頃、保険料を払っていると、大和屋さんや歌舞伎や演劇に行くと補助が出る。そしたら私ももっと行きやすくなるのですが(笑)。

中村　ごもっともです。私たちもせめて3等席を映画料金と同じくらいにしてほしいと常々、言っております。

木津川　それではこれまでの発言をふまえ、最後に上田先生にお願いします。

上田　昨年の11月、京都の祇園祭が世界遺産に登録されました。祇園祭の山鉾の装飾にはインドやペルシャ、中国などの織物が採用され、そのインターナショナル性も高く評価されました。日本の祭が日本人のなかだけで伝わっていると錯覚しがちですが、外来の文化につながっているのです。では世界遺産になったから祇園祭は安泰なのか。そうではありません。山や鉾を守る山鉾町が都市の郊外化で人口が減り、維持が難しくなっているのです。そこで山鉾町では新しい人をどんどん受け入れオープンにしている。新しい鉾町も誕生しつつあります。これが革新です。そういう点も参考にしつつ、守り、革新することで上方の文化力の発展につなげていきたいと思います。

木津川　本日はありがとうございました。

第2分科会